

[講演会抄録]

2008年度 連続研究講座：世界の危機と紛争 第1回 「アラブ対イスラエル」

講師：池田 明史
(本学国際社会学部教授)

アラブ・イスラエル紛争、あるいは、中東紛争、パレスチナ問題と呼ばれる問題については、言葉だけは、みなさん、ご存じだと思います。アラブ人とユダヤ人が延々と喧嘩を続けているというような理解なのでしょう。とにかく、大昔から続いている宿命の対決なのだから、そう簡単に終わるはずはない、ずっと続くんだというような、ある種の諦めを伴ったイメージが、どこに行っても支配的であるように思います。しかし、何千年も続く宿命の対決だから、どうにもならないという思い込みや、あるいは逆に、これは東西の代理戦争だったのだから、東西冷戦がなくなったら解決するといったような俗論は、いずれも誤解です。このことを、まずお断りしておいて、ではいったい何がそもそもの原因なのかということについて、簡単に見ていきたいと思っています。

国民国家・アラブ民族主義・シオニズム

中学校や高校の世界史の授業で習った覚えがあろうかと思いますが、18世から19世紀にかけて、国民国家（ネーション＝ステート）の時代というのがありました。人々が自分たちの集団を、同じ言葉をしゃべり、同じ歴史的な記憶を持つ一群の仲間であるというふうに考えて、それまでの、自分たちは同じキリスト教徒であるとか、同じムスリム（イスラム教徒）であるとかといったような、そういう宗教的な括りから離れていった時代です。ひとつの国の中では全員が国民として平等

で、したがって、みなが国政に参画できる、あるいはみなが兵役に就かなければならないといったような考え方というのは、それまでの身分制の秩序を崩して、フランスとか、ドイツとか、イギリスとか、イタリアとか、そういう一つの国単位の動員力をものすごく上げました。こうした考え方と、産業革命による生産力の飛躍的な増大とが重なったことで、ここに編成された国民国家という単位が、歴史上、非常に大きな力を持った単位となってきます。

で、最初にそのようなヨーロッパの膨張に晒されたのが中東です。なぜかというと、中東は地続きだからです。あるいは一衣帯水で、地中海を越えたら中東ですから、一番、ヨーロッパに近い非ヨーロッパ世界というのは中東なんです。その当時、中東の大部分を支配していたのは、13世紀以来生きながらえてきたオスマン帝国という大帝国でした。その中東の人々がヨーロッパの圧力に晒されて、あの連中に植民地にされるとか、属国にされるとかいった恐怖心を抱くようになる。日本の場合と同じですね。オスマン帝国というのはイスラムの帝国ですが、イスラムでまとまっていた時代は終わって、たとえばトルコ語をしゃべるやつは、みんな、トルコ人として新たな国民国家を作ろうとする。ヨーロッパに習って、言葉を中心にして「団結してガンバロー！」というわけです。アラブの場合には、アラブの覚醒といいますが、アラビア語をしゃべって、自分をアラブ人だと思ってる人間は、みんなアラブ人だ、アラブ民族という一つのネイションを作りましょうという運動が展開されていきました。これが、アラブ民族主義ないしは汎アラブ主義といわれるものですね。

さて他方で、ヨーロッパで国民国家化のプロセスに乗っかれずに、結局はじき出されてしまった人たちがいました。一番典型的な例がユダヤ人と呼ばれる人々です。この人たちは、もともとがキリスト教的なバックボーンを持っていたヨーロッパの中で異教徒とされていて、

キリスト教の法的な保護を受けられなかった人々です。キリスト教徒に対するユダヤ教徒で、ヨーロッパがキリスト教世界であった時代には差別され迫害されていたわけですね。シェークスピアの「ベニスの商人」に出てくる金貸しのシャイロックのような扱いを受けていた。

その人たちが、フランス革命に代表されるような市民革命を経て、表向きは「解放」される。それでも、手を変え品を変え差別は生き残る。有名なドレフュス事件その他のさまざまなユダヤ人迫害が続くのです。で、結局、ユダヤ人の知識層のかなりの部分が、自分たちに対する差別はなくなるといふある種の断念を持ったときに、ユダヤ人が自前のネイションを形成して何が悪い、という民族意識が形成されることになるのです。これがシオニズムと呼ばれるものです

他の民族主義では、ある言葉を共有する人々はだいたい一定の限られた場所に住んでおり、彼らがまとまってその場所で自分たちの政治的境界を定めて自立しよう、つまり自分たちが今居る場所で国家を作ろうとするのに対して、シオニズムはそうではないということがあります。ユダヤ人はキリスト教世界であったヨーロッパでは土地の所有を禁じられていました。その多くはあちこちの都市でゲットーと呼ばれる「ユダヤ人居住区」に閉じ込められて生活していました。「ユダヤ人はあらゆるところに、泡のように存在した」といわれる所以です。

ですから、ユダヤ人が自前のネイションを創出し、自前の国民国家を作ると言っても、「どこに？」という問題が生じます。結局、彼らが自分たちのルーツであると信じる旧約聖書の舞台、とりわけエルサレムを中心とするパレスチナの地でなければ、あちこちに離散したユダヤ人を再びひとつにまとめるような求心力を創り上げることはできないという主張が力を得ることになりました。ダビデやソロモンが都を置いたエルサレムの一角を、旧約聖書では「シオンの丘」という雅名で呼びます。これに因んで、「シオンに還る」ユダヤ人の運動という意

味の、シオニズムという呼称が生まれたのです。それは、具体的にはパレスチナの地に大量のユダヤ人を移住させる運動を意味しました。「民なき土地に、土地なき民を」というスローガンの下に、19世紀末からユダヤ人移民が何波にもわたってパレスチナに移り住んでいきました。問題は、そこは「民なき土地」ではなかったことです。そこには、後に自らをパレスチナ人と意識することになるアラブ人が住んでいたのですからね。

三つ巴から二項対決へ

このように見てくれば、パレスチナ問題というのは、要するに三つナショナリズムの民族主義のせめぎあいの中で生成されてきたことがわかります。帝国主義に転化したヨーロッパ列強の民族主義、これへの対抗の中から生まれてきたアラブ民族主義、そして、最初はヨーロッパの国民国家に同化しようとしたけれども、結局、それからはじき出されて、しょうがないから自分たちだけの国民国家を作るんだというユダヤ人の民族主義、これらがパレスチナという狭い土地をめぐる三つ巴のせめぎあいを演じたところに、問題の淵源があるわけですね。

こうした形で生成されたパレスチナ問題が、両次の世界大戦を経てアラブ・イスラエル紛争へと転換します。三つの民族主義の対抗と癒着の発展関係の中からヨーロッパが離脱したからです。簡単に言えば、二つの世界戦争ですっからかんになったヨーロッパ列強が、もはや植民地とか、属邦を持つような余力を失って、限りある資源を本国の需要に集中して回さなければならなくなったのですね。たとえばイギリスの場合には、インドとか、中東とか、そういうところからいっせいに引き揚げざるを得なくなった。で、三つ巴の対抗関係の中から、その中の大きな要素であるところのヨーロッパ列強がスポッと抜けてしまうと、あとは、振り子の二つの極が、真ん中でガチンコで正面衝突

するという話になるわけです。つまり、イギリスが、もう私は面倒見切れませんと言って、国際連盟に替わってできたばかりの国際連合に下駄を預けるということをやります。その結果、1947年11月に国際連合がいわゆるパレスチナ分割決議を出しました。国連総会決議181号と呼ばれるものです。

この内容は、イギリスの信託統治領であったパレスチナをアラブ民族主義とシオニズムとの双方に一定部分引渡し、それぞれに国家建設を認めるというものでした。但し、その中心地であるエルサレムは双方から取り上げ、ここをいわば国連の直轄都市にする形で「国際化」しようとした。ユダヤ側はこの決議を受け容れ、これを根拠として悲願であったユダヤ人の国民国家イスラエルの建設を宣言します。1948年5月14日のことです。しかしアラブ側は納得しません。もともとパレスチナの地は100%自分たちの土地だったのに、それを後から勝手に移住してきた少数派のユダヤ人と分け合えという「決議」にどうして従わなければならないんだ、と猛烈に反発して、イスラエルの建国を力づくで阻止しようとしています。アラブ人にとって見れば、それは「原状回復」のための正当な武力行使です。ユダヤ人の側からすれば、それは国家の独立を守るための正当防衛です。双方ともに、自分たちを守るための戦争として、第一次中東戦争が勃発したわけですね

転換点としての第三次中東戦争

このように、パレスチナ問題を原因として、イスラエルという国ができたあとは、アラブ諸国とイスラエルとの間の戦争へと対立の構造が転換します。中東戦争と呼ばれるものだけでも第一次から第四次まで、このほかにも第一次と第二次のレバノン戦争があり、戦争にまで至らない武力衝突は無数に起きています。その中で、いくつかの転換点、ターニングポイントがありました。最も重要な転換点は、第三次

中東戦争でしょうね。イスラエル側が6日間戦争と呼んでいるものです。

ここで決定的な勝利をイスラエルが収め、わずか6日間の戦闘で、イスラエルが48年に独立したときに取った領土（イスラエル・プロパーと呼びますが）の何倍かの占領地を取りました。ヨルダン川西岸であるとか、ガザというのは、そのときに取ったのです。それと同時に、この戦争の意味づけが重要です。イスラエルが6日間戦争と呼ぶのは、その意味づけを込めて言っているわけです。

シオニズムとは別個に、ユダヤ人の中にはイスラエル建国には非常に冷淡だった宗教勢力が存在しました。しかしこの第三次中東戦争で、イスラエルが信じられないような大勝ちをしました。エルサレムの旧市街をはじめとして、聖書に「約束の地」と書いてあるところは、この第三次中東戦争であらかた占領するわけです。すると宗教勢力の中に、これは、イスラエルという国ができたことを神が認めたんだというような議論が出てきました。旧約聖書に記された「約束の土地」（エレッツ・イスラエル、イスラエルの故地）がそこで手に入ったということと、それが6日間で手に入ったということが結びついた。神が世の中を6日間で創って、7日目は休んだという聖書の記述と符合するものですから、これは神さまがイスラエルを神聖な国として認めたんだという議論に展開していきます。

それまでは、イスラエルという国に冷淡だった宗教勢力が、今度は、そこからイスラエルという国が特殊な国だ、神聖な国だと主張し始めて、その神聖な国の領土を返すなんてとんでもないというような話になるわけです。イスラエルの中に「神がかり」的強硬派が出てくるのです。

アラブの側ですけれども、こちらは屈辱的な大敗を、宗教的な懲罰ととらえる議論が浮上してきます。今までアラブの国々が自分たちを

近代化しようとして民族主義や、社会主義や、あるいは自由主義など、さまざまなイデオロギーを試みてきたけど、それらの思想は、全部、欧米からの輸入ではないかというわけです。アラブ人自身が作った思想というのは、実は一つしかなくて、それはイスラムだという認識が、そのような主張と結びつきます。自分たちの、本来の拠りどころであるところのイスラムを捨てて、そして世俗的な、さまざまな西洋のイデオロギーに走ったがためにアラーの怒りをかい、その天罰として歴史的な大敗を喫したんだという解釈ですね。だから、これからはアラーに立ち戻って、異教徒イスラエルに対抗しようということになります。

第三次中東戦争がなぜ転換点かということ、それまでの世俗的な動きが、そこでいったん後退して、双方に宗教的な原理主義が出てきて、原理主義は絶対に相手と妥協しないという形の政治的な動きになって膨らんでいくというような構造になったからです。

戦争から和平プロセスへ

1973年の第四次中東戦争・石油危機とか、1979年のイスラエル＝エジプトの単独和平条約とか、あるいは1987年のインティファーダ（占領地騒乱）とか、いろいろと転換点はあるのですが、もうひとつだけ重大な転換点を挙げるとすると、それは、1989年、90年のあたりの冷戦構造の崩壊と、それから91年の湾岸戦争ということになりますね。なぜかといいますと、ひとつは、それぞれの側についていたパトロンが消えたということで、ようするにさんざん弾を撃っても、そのあと補給してくれるあてがあった時代が構造的に変化したからです。もうひとつは、国家利害の対立が顕在化せざるを得なくなったのです。アラブ諸国というのは20数ヶ国ありますね。それらの国々が、あからさまに国ごとの利害を追求しだしたわけです。エジプトはエジプトの利

害、ヨルダンにはヨルダンの利害、シリアにはシリアの利害という形で動くようになってきて、結局、それまでもタテマエに過ぎなかったのですが、一応は看板に掲げていた「アラブは一つ」という民族主義のイデオロギーがどんどん後退していきます。それにかわって、民族主義より、もっと大きなイスラムという、宗教のイデオロギーが伸してくるのですね。

湾岸危機・戦争で、アラブの希望の星と言われていたイラクが、自国の利害だけで隣国クウェートに攻め込んで、「アラブは一つ」という虚構に止めを刺しました。その上に、アメリカ主導の多国籍軍にボコボコにされて潰れてしまいました。そこで、イスラエルを軍事的に潰すというのはもはや不可能だろうというさめた認識がアラブの指導者たちの間に出てきます。

他方で、イスラエルでも戦略的な発想を転換せざるを得ない現実を突きつけられました。それまでの考え方というのは、自分たちと国境を接する相手とだけ個別に和平を達成し、これを積み重ねていけば自分たちの国は安全だというものでした。三方の国境線を安泰にすれば、後ろは地中海ですから、エジプトとヨルダンとシリアとレバノン、この四ヶ国と和平条約を結べば、あとはどうでもいいじゃないかと思っていたわけです。

それが、この湾岸戦争のときには、国境を接していないイラクという国からポコポコ、ミサイルがとんできたので、隣国との二国間和平を積み重ねるだけではどうにもならないという認識が出てきます。アラブ全体と、何らかの了解を取りつけないと、これはいつ、どこからミサイルが飛んできてもおかしくない。そのミサイルに、もし、毒ガスやら、下手すると核兵器が積まれていたら、一発でおしまいだよ、という話になります。しかも、イスラエルは、いくら最新鋭の兵器を持っていると自慢していても、旧式のイラクのミサイルを一発も

撃ち落とせませんでした。

結局、こうした認識の変化が双方に生まれて、アラブ＝イスラエルの対立を軍事的なオプション、つまり戦争で解決することは事実上不可能だとアラブ側は考え、イスラエル側でも相手を武力で黙らせるということはできません、また軍事的に完璧な安全保障も無理がありませんという話になったのです。ほかにも、いくつか理由がありますけれども、軍事的なオプションが消えた以上、問題は政治的に決着を図るしかないですねということになって、1991年のマドリッド会議になり、そのあと、パレスチナも含めて1993年のオスロ合意になっていったという構造になろうかと思います。

見えない展望—正義か、平和か—

このような形で中東紛争から中東和平への構造的な転換が起きました。三つの民族主義の対抗と癒着の発展関係の中から紡ぎ出されたパレスチナ問題が、そこからヨーロッパ列強が脱落することでアラブ＝イスラエルの間の正面衝突、つまり戦争へと構造を転換し、それが冷戦構造の終焉とこれに伴う地域的再編の動きの中で再び構造転換を起こして、現在の中東和平の流れにつながるようになったと、一応は説明することができます。しかしそれは、パレスチナ問題がアラブ＝イスラエル戦争から再びパレスチナ問題へと還ってきたということであって、パレスチナ問題それ自体が解決されたことを意味するものではありません。オスロ合意から、ロードマップやアナポリス会議など、国際社会の仲介でパレスチナ問題の解決を目指す動きは続けられていますが、ヨルダン川西岸地域の都市部とガザ回廊とにパレスチナ自治が大枠で認められたオスロ合意以降、余り目立った進展はありません。

最近では、西岸地域をパレスチナ世俗勢力のPLO（パレスチナ解放

機構) 主流派ファタハが統治し、ガザ回廊ではファタハを武力で追い出したイスラム過激派ハマスが支配するという構図になっています。国際社会はこのファタハをパレスチナ自治政府の正当な統治者と認め、ガザのハマスに対してはさまざまな制裁を課して、ファタハへの屈服を導き出そうとしているところです。なぜかといえば、ハマスは「イスラエルを承認せず、和平合意を尊重せず、テロを否認しない」という「三つのノー」を唱えて、和平交渉それ自体を認めようとしなからずです。しかしながら、ハマスへの圧力を強めれば強めるほど、パレスチナの人心はファタハを離れ、ハマスに向かうという傾向が出てきており、パレスチナ問題の解決への展望は一向に見えてきません。

どうして展望が見えないのか。いろいろ要因はあるのですが、ひとつ考えなければならないのは、イスラエルにせよ、パレスチナにせよ、双方ともに現在のところ「勝った」とも「負けた」ともよくわからないということではないでしょうか。なるほどイスラエルは独立国家として建国され、パレスチナは占領され、アラブ側はそれを取り返せていません。しかしその結果として開始された和平プロセスは、ようするに「土地と平和との交換」を原則とするやりとりですよ。70年代末のイスラエル・エジプト和平交渉にせよ、現在のパレスチナ和平プロセスにせよ、「勝った側が奪った領土を画定する」手続きではなく、「勝った側が奪った領土を返還し、その対価として平和を得る」取り引きにほかなりません。イスラエルの国民心理としては、アラブ側とのあらゆる戦争に勝ち続けた、もしくは一度として負けなかったイスラエルが、戦勝のシンボルであり「目に見える」戦利品である土地を取り上げられ、その代わりに(負かしたはずの)相手から「目に見えない」約束でしかない平和を「与えてもらう」プロセスに映るわけですね。

他方のパレスチナ側では、占領され迫害されている自分たちは局地

的に劣勢ではあっても、より大きなアラブというネーションの一員であり、さらに大きなイスラム世界の構成員である以上、まだまだ決着はついていないといった威勢のいい声が歓迎されることとなります。アラブ全体とイスラエル、イスラム世界全体とイスラエルという量的比較や十字軍時代の歴史的経験を持ち出して、個々の「戦闘」に何度敗退しても、「決戦」で一度勝てば「戦争」に勝つには十分だとの楽観論で、悲惨な現実からの逃避をはかるメンタリティが、そこには形成されているのです

紛争当事者の双方の側で、潜在的にせよ顕在的にせよ、「勝ち負けをはっきりさせたい」という意識が幅を利かせている限り、つまり勝つことで自分たちの正しさを証明したいという欲求が後景に退かなければ、和平プロセスの前途は厳しいと考えざるを得ません。平和とは、詰まるところ自分たちの正義をどこまで降ろして、相手の正義との妥協を図るかという技術にほかならないのですから。